

# 琉球大学学術リポジトリ

## 果菜類育苗の準備

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 友寄, 長重, Tomoyose, Choju メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/19884">http://hdl.handle.net/20.500.12000/19884</a>

# 果菜類育苗の準備

## 一、はしがき

果菜類の育苗の必要性については、筆者が琉大農家便り五七年十、十一、十二月号に連載して、論じましたが、要約しますと、①育苗して大苗を定植する事により、圃場の使用期間を短縮し、後作の他の蔬菜類を早くから作付ける事が出来る。

②果菜類は六月になると最盛期になつて、単価がずつと下落するから、一月から温床場を作つて苗を育てる事により単価の高い五月以前に収穫出来る事が出来る事が要点になつております。又育苗する為には保温、加温する事が有利である事を述べましたが、実際の育苗操作は次号に述べる事にして、育苗する為は何を準備したらよいかという事について述べてみたいと思ひます。

## 二、温床施設

1、温床場の位置 温床は日夜天候に応じて集約な管理を必要とします。したがつて家屋に近く水の便のある所が選ばれるが、共同育苗で多量に育苗する場合は圃場に近い所に設けられることもあります。此の場合は防風垣を作る必要があります。又地下水位が高く、じめじめした所は適しません

2、温床わく 樞は石、コンクリート、セメントブロック、木板、わら等で作られます。大きさは4尺×12尺を以て標準型とされますが、大量に育苗するの必要のないヘチマ ニガウリを育苗する時にミ

カン箱でも利用出来ます。しかし小さい温床では温度の上下が急激で、保温もよくありません。標準型の温床を作る場合には、先ず床底の囲りを床面上より五十種位の深さに土を掘り下げ、且つ囲りを低くし中央より南北の方が高くなるようにします。之は床全面の温度を一樣にするためであります。樞は北側を高くしますが、傾斜の程度は雨が流れる程につければよく、又障子と床面の距離は苗の伸長に差支えがない限り近づけた方が光度も強く、温度も上り、苗の発育も良いが、障子の傾斜が急であると、苗の発育が不揃となりがちであります。

3、障子 樞の上を覆い、保温するために硝子障子油障子が使われますが、最近では安価で簡単に作れるビニールを使う事が流行して来ました。ビニールは種子店等で販売されています。厚さ〇、〇一ミリのものは光線の透過量はよいが、風に弱く、長もちしません。二重ばりしたら強くなります。〇、一ミリのものは相当長もちします。障子は温床わくの上面に合わせてがつちり作ります。わくの傾斜がゆるやかで、ビニールがよく張りつめてないと、雨が降つて水がたまります。障子の大きさは標準型の温床では三尺×四尺のもの三つ必要です

4、被覆物 夜間又は日照の少ない寒冷の日には、障子上からカマス等で覆うて保温する方が得策です。

## 三、醸熟材料

踏み込み材料としては、都会地では塵埃を、農家では落葉、野草を集めます。豆類の莖葉は発熟状態もよく、大根葉、南瓜等の蔓、野菜の屑、とうもろこし、稻等の稈茎、靱がらなど何でも腐敗するものは乾燥して保存します。又馬糞は新しいもの程よく、きゆう肥も敷わらと共に使えます。之等の材料は主に炭素を微生物に供給し、その醗酵作用で発熟しますので、必要な窒素分を別に加えなければなりません。微生物は酸性を嫌いますので、硫酸を使わず、石灰窒素を準備します。又鶏糞も利用出来ます。

## 四、土

床土を入れる少なくとも六カ月前に培養土を準備する必要があります。培養土としては、適当に肥料養分を含み、病虫害のおそれがなく、通気、排水、保水、保湿がよい事が条件になつております。堆積方法は土、堆肥を大体六寸位の厚さに交互に積んで、此の間に大豆粒類を一立坪につき十貫過石十貫、木灰二十貫、を散布します。之等の材料が得難い時は下肥百貫、木灰二十貫位でも使います。使用前一、二回側面から切り返し積み直します。堆肥材料は特に病虫害に気をつけて、野菜類は南瓜、甘藷の蔓以外は使わない様にします。来年の育苗で此の様な培養土を準備してない時は土と堆肥を半々にし、適当な肥料養分を混合して準備します。茄、キュウリは稍肥料の多い方がよく、トマト、カボチャは控え目の方が育苗は楽であります。

(友 寄 長 圃)